

アメリカに渡った日本人移民に関する歴史研究の現在

—『日本人アメリカ移民史』補論—

坂 口 満 宏

はじめに

本稿は、一九八〇年代半ばから今日にかけて公表された日本人移民とりわけ「アメリカに渡った日本人移民」に関する歴史研究の現状を総括し、二〇〇一年一月に上梓した拙著『日本人アメリカ移民史』（不二出版、二〇〇一年）の補論としたものである。

拙著刊行後、少なからざる方々から拙著に関する研究史の整理ならびに参照文献の一覧が収録されていないという不備につき、厳しいご指摘をいただいた。拙著が既発表論文を集めたものであるとはいえず、本研究の位置付けを明確にする研究史ならびに各種先行研究文献の一覧を収めなかったことは、ひとえに著者である坂口の怠慢であったといわざるをえない。そこでここに『史窓』の誌面を拝借して拙著の不備を補うこととした。まずは近年の日本における移民史研究の動向とその成果を概観し、ついで拙著で取上げた各種テーマをめぐる研究状況を述べ、末尾に主要日本語参考文献、主要英文参考文献を掲げることとする。

一 移民史研究をめぐる近年の動向とその成果

人の移動に対する関心の高まりと新たな研究 一九八〇年代半ば頃から九〇年代にかけて、旧ソビエト連邦の解体、東西ドイツの統合、東ヨーロッパ諸国における民族紛争が激化し、世界各地で国家の解体と再編が繰り返された。またヨーロッパ共同体とそれにもなう新たな国家の再編、さらには世界各国での国際的な労働力移動、外国人労働者、難民、定住外国人の権利問題など国境を越えた人の移動にもなう諸問題が噴出し、社会学や文化人類学、言語、教育学など多様な領域において「人の移動」に関する研究が高まった。なかでも桑原靖夫『国境を越える労働者』（岩波新書、一九九一年）は、出稼ぎ・移民労働者、難民の増大が「環境」問題と並ぶ地球規模の課題となっていることを逸早く指摘したもので、経済事情、国際関係の変化に伴って国際的な移民市場がダイナミックに変遷してきたことを明らかにした。梶田孝道編『国際社会学』（名古屋大学出版会、一九九二年）も八〇年代の「新しい現実」を直視し、新しい地域研究と国際関係と

窓の関連付けを構想したもので、国際化時代のエスニシティのとらえかた（関根政美「エスニシティの社会学」）や国際社会の構造に重大な影響を及ぼす移民労働者の歴史的展開（小倉充夫「移民・移動の国際社会学」）等について理論的な整理がはかられた。

歴史学界においても国境を越えた「人の移動」という視点に注目が集まり、一九八八年には歴史学研究会が「人の移動から歴史を見る」（『歴史学研究』五八一、五八二号）と題した特集を組み、「人の移動」が歴史学に提起する問題群として「人の移動は歴史学に何を提起しているか」「移動する人々の眼・移動する人々を見る眼」「人の移動と生活・意識の変容」「移動する人々に対する国家・社会の対応」というトピックスを提示した。その後も一九九〇年度大会近代史部会において「近代世界における移殖民と国民統合」（同六一三号）、二〇〇一年度大会では「都市における移住者の世界」（同七五五号）を部会テーマに掲げ、研究の裾野を広げた。なかでも九〇年度大会において木村健二は、近代日本の海外への人口移動を二つに類別し、日本人が同化させる側として立ち現れる植民圏（勢力圏）への移動と同化されるものとして位置付けられる非植民圏（非勢力圏）への移動という二つのタイプが併存していたことを喚起し、この二方面への移民・植民活動をトータルに把握することの重要性を強調した（『近代日本の移民・植民活動と中間層』）。また歴史科学協議会においては一九九三年一月の『歴史評論』が「近代日本の『移民』を問いなす」という特集を組み、二〇〇二年五月には「移民と近代社会」という特集テーマを掲げ、ヨーロッパ移民ならびにアメリカ移民史研究の現状と課題を整理している。

こうした研究動向と成果に並行するようにして、近年では『移動の地域史』（『地域の世界史』五、山川出版、一九九八年）、『人と人の地域史』（同九、一九九七年）、山田史郎他著『近代ヨーロッパの探求一移民』（ミネルヴァ書房、一九九八年）、『岩波講座世界歴史一九 移動と移民』（岩波書店、一九九九年）など移民史を新しい世界史研究のなかに位置付けなおそうとする企画や研究書があいついで編纂され出版された。

もとよりこうした企画が実現してきた背景には、移民事象を積極的に歴史研究の対象にすえようとする課題意識のたかまりとともに、これまで十分に考察されてこなかった分野であることへの反省と発見、旧来のアカデミズムの枠を横断した学際的な研究方法の模索がなされてきたことがある。当然研究の裾野は広がり、従来からの南北アメリカへの移民史はもとより、ヨーロッパ各地での移民事象、中国、東南アジア各地に広がる華人・華僑の歴史と現状、南アジア・インドにおける移民の存在、日本が領有した植民地地域への移住問題に対しても関心が高まり、研究動向の整理も進み、新たな成果と課題が示されてきた。

飯島渉編『華僑・華人史研究の現在』（汲古書院、一九九九年）は、文字通り、これまでの華僑・華人史研究の成果から今後の研究に求められる視座と展望を描いた論考を収めたもので、近年の「華人ネットワーク」、重層化する華僑・華人のアイデンティティに関する研究動向をまとめている。

重松伸司『国際移動の歴史社会学』（名古屋大学出版会、一九九九年）は、「国際人口移動」という視点から、これまでの研究動向に見

られた二つのアプローチすなわち国際的な経済システムを維持する労働資源（エコノス）として移民に着目するものと、国家あるいは特定の社会集団を構成する社会・文化的集団（エトノス）としての移民に対する視点の統合をめざしたもので、前者は主に経済学で扱われ後者は社会学、文化人類学、歴史学などで取り扱われ、互いに乖離しあう傾向にあったが、求められることはこれら両側面の視点を統合的にとらえる移民研究の方法を提示することであるとして、インド系移民を事例にその具体化をはかったものである。移民を統合する社会経済的基盤としての講と移民組織の実態、血縁・同郷・同好などを要素とする移民社会の複合的ネットワーク、社会文化的な結合システムの形成論理が明らかにされており、そこでの分析手法はアジア系移民の分析にとどまらず、非アジア系移民の研究事例に対しても大いなる示唆を与えるものである。

なお近年のアジア系移民に関するものとしては『アジア遊学』第三九号の特集「移民のエスニシティと活力」があり、アメリカ合衆国におけるアジア系移民、日本に在住するアジア系移民の歴史と現状について多角的な整理がなされている。

最後に日本の植民地史と移民・殖民問題を取上げたものとして柳沢遊・岡部牧夫編『帝国主義と植民地』（展望日本歴史二〇、東京堂出版、二〇〇一年）をあげておこう。同書は一九八〇年代以降に執筆された当該問題に関する重要論文を収録するとともに詳細な文献目録を附したもので、研究状況を把握するものとして極めて有益である。岡部牧夫『海を渡った日本人』（日本史リブレット五六、二〇〇二年）は、簡潔ながらも一九世紀後半から二〇世紀半ばにかけての日本人に

よる海外移住体験を総合的に把握しようとするもので、北米・南米移住のみならず東南アジア、満州への移民活動の歴史的意義を的確にまとめている。かつて木村健二が日本の勢力圏と非勢力圏双方への移住が同時並行的に進んでいたことに留意すべしと提起したが、岡部の考察によって木村の提言は一つの具体化を得たといえよう。

アメリカに渡った日本人移民に関する史的・研究的進展 アメリカ（北米地域）に渡った日本人移民に関する研究は、一九五〇年代から日米関係史や文化交流、留学生研究の傍流といった存在で示されてきたが、一九八八年にアメリカとカナダがそれぞれ第二次大戦中の日人強制収容問題に対して正式に謝罪し、補償することを表明したこと（リドレス運動の成果）を契機に、資料の発掘と公開が進み、新たな研究が進んできた分野である。

日本における日本人移民、日系アメリカ人研究の動向については桑井輝子、飯野正子「日本における日本人移民、日系アメリカ人研究」（『東京大学アメリカ研究資料センター年報』第一三三号、一九九〇年）による整理があり、また両氏を中心とする移民研究会が編集した『日本の移民研究 動向と目録』（日外アソシエーツ、一九九四年）は、九〇年代半ばまでの研究状況を整理しており、極めて有益なものである。また国立国会図書館は一九八一年度に日本人移民関係資料を広く収集する方針を決定し、アメリカ本土、ハワイ、ブラジル、カナダを中心に南北アメリカ各地の移民関係資料の調査と収集を進め、その作業は今日も続いている。いずれそれらは憲政資料室が所管する関係資料とともに整理され、収蔵品目の資料目録が作成されるであろうが、今日までに収集した資料の概要については「移民に関するあらゆる資

窓料」を総覧的に収録することを目的とした神繁司の書誌目録「ハワイ・北米における日本人移民および日系人に関する資料について」(1) (『参考書誌研究』第四七、四八、五二、五四号) に集約されている。目下のところ、この書誌目録の到達点こそが過去百年あまりにわたる移民研究の現状とりわけアメリカ、ハワイへと移住した日本人移民史に関する研究の進展状況を最大限に物語っている。

移民関係資料の復刻・公開 一九九〇年代に移民史研究が活発化した要因のひとつに、移民史研究に不可欠な史料があいついで復刻されたこともあげられる。その先駆けは、日本人移民史の代名詞的存在となっていた『在米日本人史』の復刻(日本人海外発展史叢書、P M C 出版、一九八四年)がなされたことである。一九四〇年に刊行された同書は、アメリカにおける日本人移民史を網羅的に叙述した大著であり、当該分野の研究を志すものにとっては最も簡便な手引書であり、史料の宝庫であった。しかし原著の所在は極めて少数の図書館や研究機関に限られていたため、容易に閲覧できるものではなかった。そうした移民史研究に不可欠な史料が復刻され、手軽に入手できるようになったのである。その後も出版各社から日系移民に関する資料集の復刻・刊行があいつぎ、研究の裾野を広げること寄与した。『日系移民資料集』第一期北米編全一八巻、同第二期南米編全三〇巻、『日米年鑑』全一二巻(いずれも日本図書センター)、『殖民協会報告』全一三巻、『カナダ移民資料』I 全五巻、同II 全六巻、『日系アメリカ文学集成』全二二巻(いずれも不二出版)などはその一例である。また日本人移民が集住していた地域で発行されていた各種日本語新聞のマイクロフィルム化も進み、その入手が容易になったことも重要な要

因であろう(例えば『日米新聞』『新世界』〔以上サンフランシスコ〕、『桜府日報』〔サクラメント〕、『羅府日報』『加州毎日』〔ロサンゼルス〕、『大北日報』〔シアトル〕、『大陸日報』〔ヴァンクーヴァー〕などがあり、ハワイ関係では『日布時事』『布哇殖民新聞』『馬哇新聞』など)。

アメリカ、カナダの研究機関による日系移民資料の整備と公開が進んだことも一九八〇年代以降の移民史研究を活発化させた重要な要因である。一九七〇年代のアジア系アメリカ人運動の拠点でもあったカリフォルニア大学ロサンゼルス校では、ユウジ・イチオカ、阪田安雄を中心に日系アメリカ人関係資料(The Japanese American Research Project Collection)の収集と整理が進められ、その成果は Yuji Ichioaka, Yasuo Sakata, Nobuya Tsuchida, Eri Yasuhara, *A Buried Past: An Annotated Bibliography of the Japanese American Research Project Collection* (Berkeley: University of California Press, 1974), Yasuo Sakata, *Fading Footsteps of the Isei: An Annotated Check List of the Manuscript Holding of the Japanese American Research Project Collection* (Los Angeles: Asian American Studies Center, Center for Japanese Studies, University of California at Los Angeles: Japanese American National Museum, 1992) として公刊されている。ワシントン大学ではそのスペシャルコレクション室に「北米日本人会関係資料」が保管され、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学には「日系カナダ人資料」が収蔵されており、その主要部分がマイクロフィルム化されていることから、今では日本にいなからそれらを容易に閲覧

して研究できる環境に至っている。こうして今日の日系移民史研究においては、もはや復刻資料に留まるのではなく、復刻資料の典拠ともいべき各種団体の記録や個人の手記といった一次資料、新聞資料にまで立ち返り、史実を検証し、歴史的事実の確定と意味づけを行う段階となっている。

さらにリドレスの達成にともなう教育プログラムの支柱として各地に日系人博物館、資料館が設置され（カナダの日系プレス内にあるカナダ日系博物館、シアトルの伝承プロジェクト、サンフランシスコのナショナル日系アメリカ人歴史協会、ロサンゼルスのみ全米日系人博物館など）、文献資料はもとより、オーラル・ヒストリー、写真・映像資料の収集と保管、公開が進んだことも重要である。なかでもロサンゼルスにある全米日系人博物館（Japanese American National Museum）は同種資料機関のなかにおいて最大規模のものであり、資料の収集・展示はもとより、南北アメリカ大陸に展開した日系人の移住過程を総合的かつ歴史的にあとづける国際的な共同研究を推進し、その成果を公表した。Japanese American National Museum, Brian Niya Editor, *Encyclopedia of Japanese American History: An A-to-Z Reference from 1868 to the Present, Updated Edition* (New York: Facts On Files, Inc., 1993, 2001) は、日系アメリカ人の歴史年表、人名、事項事典として時系列的な事実確認と資料上の典拠を知るものとして便利であり、国際日系研究プロジェクトの成果は Lane Ryo Hirabayashi, Akemi Kikumura-Yano, James A. Hirabayashi, ed., *New Worlds, New Lives: Globalization and People of Japanese Descent in the Americas and from Latin*

America in Japan (Stanford: Stanford University Press, 2002) として刊行されている。またその関連企画として編集されたキクムラヤノ編『アメリカ大陸日系人百科事典』（明石書店、二〇〇二年）にはアルゼンチン、ボリビア、ブラジル、カナダ、チリ、メキシコ、パラグアイ、ペルー、アメリカ合衆国各地における日系移民の歴史とそれに関する研究文献の解題が収められており、研究動向を知るうえで極めて有益である。

さて最後に近年における日本での研究状況を概観しておこう。一九九〇年代前半までの研究成果を最大限にふまえ、日本における渡米熱、出移民状況から移住地における移民社会の形成、排日問題から日系人の強制収容にいたるまでの諸問題を「移民史学」の観点から叙述したものに梶井輝子『外国人をめぐる社会史―近代アメリカと日本人移民―』（雄山閣、一九九五年）がある。また飯野正子『もう一つの日米関係史―紛争と協調のなかの日系アメリカ人』（有斐閣、二〇〇〇年）は、日本人移民の渡米から日系人の戦時強制収容問題、戦後補償運動までの推移をコンパクトに概観したもので、文献目録も整備されており、研究の指針となる。さらに両氏を中心とする共同研究の成果に移民研究会編『戦争と日本人移民』（東洋書林、一九九七年）があり、同書第二部には詳細な南北アメリカにおける日系人強制収容年表が附されている。他方、日系アメリカ人の戦時強制収容と補償運動については岡部一明『日系アメリカ人 強制収容から戦後補償へ』（岩波ブックレット二三四号、一九九一年）が問題の所在を的確に概略しており、竹沢泰子『日系アメリカ人のエスニティー 強制収容と補償運動による変遷』（東京大学出版会、一九九四年）が強制収容問

窓
題をめぐる認識を機軸とした日系二世と三世のアイデンティティ認識
を考察し、当該研究の到達点を示している。

以上、一九八〇年代以降の移民史研究に対する関心の高まりと研究
の動向について概略したが、アメリカに渡った日本人移民に関する歴
史研究についてもその研究対象は、政治・外交の分野から労働問題や
戦争と日系人強制収容、マスコミ、教育、言語、文学、コミュニテ
ィ、アイデンティティ問題などと極めて多岐にわたっており、そのす
べての研究状況をトータルかつ簡潔に総括することは難しい。

そこで以下では坂口が『日本人アメリカ移民史』の各章において取
上げた八つの中心的テーマをめぐる研究状況について論述し、坂口の
おこなった研究（以下、本研究とする）の研究史上の位置と残された
課題を示すという方法をとることにしたい。

二 『日本人アメリカ移民史』で取上げた 各種テーマをめぐる研究状況

(1) アメリカに築かれた初期日本人移民社会に関する研究

アメリカ合衆国に渡った日本人が特定の地域に集住して、いわゆる
日本人街を築いたことはよく知られている。しかしサンフランシスコ
の日本町やロサンゼルスのリトルトーキョーに関してはその形成過程
に関する研究は、意外なほどに少ないのが現状である。確かに初期日
本人移民社会の形成史を略述したものは数多いのだが、移民社会形成
期の同時代史料にもとづきつつ当該地域での多様な社会的結びつきや
諸組織の動向を歴史具体的に分析したものは、存外、少ないといわざ

るを得ない。概略的な歴史を叙述するにおいても『在米日本人史』や
イチハン・ヤートの古典的な著作 (*Japanese in the United States:
A Critical Study of the Problem of the Japanese Immigrants
and Their Children*, Stanford University Press, 1932) を参照する
ものがほとんどで、それらを要約して叙述しているのがこれまでの実
情であった(翻訳版であるが、例えばR・ウイエルソン、B・ホソカ
ワ『ジャパニーズ・アメリカン』有斐閣選書R、一九八二年などがそ
の一つである)。近年にいたりようやく「福音会沿革史料」などの一
次史料を用いた研究が進み、形成期日本人移民社会の一端が具体的か
つ実証的に描かれるようになったが、そうした研究にあっても、描き
出されたのはサンフランシスコに創設された一宗教団体や青年団体の
動向であって、必ずしも後の「日本人町」へと発展していく過程と内
実の総体的な把握を展望するものではなかった(同志社大学人文科学
研究所編『在米日本人社会の黎明期—「福音会沿革史料」を手がかり
に』現代史料出版、一九九七年)。

またシアトルに形成された日本人社会の研究に関しては Frank
S. Miyamoto の古典的な研究 (*Social Solidarity among the
Japanese in Seattle*, University of Washington Publications in the
Social Sciences 2, 1939, reprinted 1981, 1984) があるが、そこで明ら
かにされた日系社会の諸施設や諸団体の活動は一九二〇年代のもので
あり、ある程度成熟し、完成してきた日系コミュニティの現況を社会
学的に分析したものであった。ロサンゼルスのリトルトーキョーの形
成過程をその社会経済的側面に着目して考察したものに南川文里「エ
スニック・タウンの経済的編成—リトルトーキョーの初期形成過程を

通して―」（『移民研究年報』第七号）があるが、そこでの方法は一九〇七年、一四年、二一年に刊行された三種類の住所録を典拠に日系人の空間的凝集度／分散過程を定点的に解析するもので、移民社会の形成過程を動態的に描き上げるものではない。

ではこうした移民社会形成期に関する研究状況を乗り越えていくうえで求められることは、何であろうか。やはりそれは二次的史料に依存することなく、同時代史料に立脚した幅広い考察と意味づけを行なうことであろう。日本人移民社会形成史に関してそれをおこなおうとするならば、移住者自身の記録、現地新聞、現地から日本への通信文、受入れ社会側の記録、外務省記録、領事報告書などを広く渉猟し、居住者、職業、公共団体、情報媒体、諸団体の実態等を視野に入れ、立体的かつ多面的に分析することが求められることになる。本研究はその試みの一つだが、シアトルに作られた日本人移民社会を分析対象とし、『日本人』『大北日報』など現地で発行された新聞、翁久允を代表とした移住者自身の記録、『通商彙纂』を含めた各種外務省記録や統計類を用いて考察したものである。

またその考察に際して援用した視点は、都市民衆の日常生活における社会的結合論いわゆるソシアビリテの議論である。居酒屋や旅館に集う人びとの絆に着目したフランス社会史の方法を援用することで、国境を越えて移住してきた日本人移民が出身地域の結びつきを維持しつつもいかにして新しい生活の地で新たな共同性や社会的結合を生み出していったのかという点に焦点を絞ってみたものである。こうした視点はナショナルリズムとよばれる感情がどのようにして形成されるかという問題に結びつくものであり、近年では日本における朝鮮人社会

の形成過程を分析した研究にも援用されている（外村大「戦前期在日朝鮮人の社会的結合・文化・アイデンティティ」『歴史学研究』七五号、二〇〇一年度歴史学研究会大会報告）。

本研究によってこれまで本格的に議論されることのなかった「県」人意識や各種日本人団体の結びつきについても構造的に把握する視座を提起しえたと思われるが、日本人移民を受け入れる立場すなわちホスト社会からみた日本人移民社会の存在や中国人移民など日本人移民に先駆けて移民社会を形成した他の民族集団との関わりについての言及が欠けているため、やや一面的なものとなっていることは否めない。こうした不備を補うためには日本語新聞や外務省記録にとどまることなく、*Seattle Times* や *Seattle Union Record* などの現地有力紙、労働組合機関紙、州政府関係文書を用いた分析が求められよう。

(2) 日本語新聞研究

移民社会において発行された日本語新聞に関する研究は、新聞学、マスコミュニケーション研究の中で独自の蓄積がはかられてきた。とりわけ蛸原八郎の『海外邦字新聞雑誌史』（学而書院、一九三六年、名著普及会、一九八〇年復刻）は、ハワイ、北米各地で発行された日本語新聞・雑誌を網羅的に整理し、考察したものととして先駆的である。

その後、海外とくに北米地域の日本語新聞、日系メディアについて実証的かつ地域的にも広範囲にわたる分析を進めているのが田村紀雄とその共同研究グループである（その主たる研究成果に田村紀雄・白水繁彦編『米国初期の日本語新聞』勁草書房、一九八六年、新保満・田村紀雄・白水繁彦著『カナダの日本語新聞』PMC出版、一九九一

窓 年、田村紀雄編著『正義は我に在り』社会評論社、一九九六年などが

あり、共同研究の成果は東京経済大学の紀要『東京経済大学人文自然科学論集』『コミュニケーション科学』に随時収録されている。

移民社会におけるエスニック・ペーパー、とりわけ日本語新聞を研究することの意義と課題は、当該新聞研究の位置付けに応じてきわめて多岐にわたるが、ここでは前掲『カナダの日本語新聞』（第一、第二章）を参照し、大別して以下の二点を示しておくたい。

その一つは、移民社会のホスト社会への「同化」プロセスとしてエスニック・ペーパー（日本人移民であれば日本語新聞）の盛衰を位置付けるものである。ホスト社会に移住してきた移民集団は、移住当初、出身言語にもとづく新聞を発行することで自らの共同性や連帯感の維持をはかろうとするが、次第にホスト社会の「同化」圧力に適應していくなかでホスト社会の言語（アメリカやカナダであれば英語）の刊行物へと移行し、究極的には消滅していくものとして（また消滅しないのならばそれはなぜか、という関心から）検証するもので、新聞というエスニック・メディアの存否や編集のあり方を通して、当該民族集団のホスト社会への同化指数に位置付けようとする議論である。

第二の論点は、右の論点をふまえつつも、ある特定の移民社会の中で、一つの新聞が積極的にホスト社会への「同化」を主張するものであったならばそれに対抗する主張をもった新聞が発行され、互いに競合と対立関係を生むものであるということに着目するもので、エスニック・メディアの並立状況をつうじて移民社会内部の複雑性や対立関係（「同化」への志向度や難易度）を見出そうとすることである。

カナダにおいては『加奈陀新報』と『大陸日報』の競合関係などがその典型であるが、サンフランシスコでは安孫子久太郎の『日米新聞』とその他の新聞、ロサンゼルスでは『羅府新報』と『加州毎日』などが互いに競合しあう新聞として著名で、各紙についてその創刊事情と創設者、主要新聞記者と論説記事の分析などがおこなわれてきた。

本研究は基本的には第二の動向に位置付くもので、シアトルで発行された主要日本語新聞の創刊事情とその系譜を体系的に整理することを意図したものである。シアトルを事例にとりあげた第一の理由は、サンフランシスコやロサンゼルス、カナダのヴァンクーヴァーで発行されていた新聞の研究に比べて最も研究が立ち遅れていたことにあるが、第二の理由としては、本研究がシアトルで発行された『大北日報』を主要史料として用いる必要上、典拠となる『大北日報』の創刊事情からその後の推移、さらには移民社会における位置を説明しておくことが不可欠であったことによる。

本研究によって研究の空白部であったシアトルの日本語新聞については一定の進展をみせたといえるが、今後は第一の論点にみるようなホスト社会に対する「同化」指数として日本語新聞をとらえなしてみることも重要であろう。そのためにはホスト社会の主要英字紙や労働組合の機関紙などとの関係、中国系やフィリピン系などのアジア系移民メディアとの関係についても考察されねばならない。また日本語新聞の紙面の大半は日本から配信されてきた通信文や連載小説などで埋められていることから、日本国内で発行されていた新聞メディアとの関係についても明らかにされる必要があるであろう。

(3) 日本人会の研究

移民社会における主要な日本人団体・組織の研究という点において比較的早くから解明の進んだ領域は、宗教団体とりわけ日系キリスト教会や仏教会、海を渡った日本の新宗教の研究であろう。井上順孝『海を渡った日本宗教』（弘文社、一九八五年）、中牧弘允『新世界の日本宗教』（平凡社選書、一九八六年）、同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』（PMC出版、一九九一年）などがその主たるものである。個々の宗教団体においては五〇年史、一〇〇年史などと銘打った個別の歴史叙述が残されるところに、教会ごとくに月報類や宗教者・信者による回想録などが多数出されていることから、文化変容のケーススタディとして早くから研究が進んだ。また第二次大戦前から今日まで続く日系二世の政治団体である日系アメリカ市民協会（JACL）などについても当事者による回顧や評伝を通じて個別研究がなされてきた（ビル・ホソカワ『一二〇%の忠誠』、有斐閣選書R、一九八四年）。ただし、これらについては、一九三〇年代以来、一貫してアメリカに対して「忠誠」を表明してきたという当事者の認識を示したい、定着させたいとの意図から研究されたという側面も無視し得ない。

こうした研究事例と対比したとき、第二次大戦前の日本人移民社会にあって政治的にも社会的にも重要な役割を果たしていた日本人会や県人会についての研究はきわめて立ち遅れているといわざるを得ない。その原因について阪田安雄は、一九八〇年代のアメリカにおいて日系人の戦後補償問題（Redress）を追及するにあたり、戦前の日本人

会にみられた日本主義的言動、祖国支援活動の実態が解明されるとリドレスに悪影響をおこしかねないという政治的配慮が存在したため、それが戦前とりわけ一九三〇年代の研究を躊躇させることになったのだと指摘している（「戦後五〇年と日系アメリカ人史研究―語られない一九三〇年代―」『移民研究年報』創刊号）。

そうした配慮を抱きつつもアメリカ国内に組織された日本人会の役割と活動の実態を研究対象としたのがイチオカである。イチオカは一九七七年に「Japanese Associations and the Japanese Government: A special Relationship, 1909-1926」(*Pacific Historical Review* XLVI 1977, 409-437) を公表し、その後それを *The Isei* (New York & London: The Free Press, 1988) 後に『一世』と題して翻訳される、刀水書房、一九九二年) に収録した。イチオカの研究によって初めて日本人会に関する実態的かつ構造的な理解がはかれるようになったといえるが、その分析対象がサンフランシスコを拠点とした在米日本人会という最も日本領事館との関係が強い事例を用いたことから「日本政府・領事館に従属する日本人会」というイメージが強調されすぎているといわざるを得ない。

近年にいたって、サンフランシスコ以外の地方日本人会をケースとした研究も登場してきた。都市コミュニティの形成とエスニシティの関わりという視点から羅府（ロサンゼルス）日本人会の組織と活動について分析した山本剛郎は、イチオカの成果をふまえて、コミュニティの形成過程は「小は各地方日本人会を核に、中レベルは羅府日本人会（後の南加日本人会）を中心とする南加連合日本人会を核に、さらにサンフランシスコの在米日本人会をも含む加州全体を包含するとい

う風にも形成されるものと考え」と指摘した(『都市コミュニティとエスニシティ』、ミネルヴァ書房、一九九七年)。また米山裕はロサンゼルス大学カリフォルニア校が所蔵する羅府日本人会関係資料を駆使し、役員の選出事例に関して詳細な考察と内紛事情の分析に取り組んでいる(『羅府日本人会役員選挙と在ロサンゼルス日本人社会の変容、一九一五～一九二一年』(『立命館史学』第二二号)。だが米山にあっても未だ羅府日本人会の組織分析や同日本人会を中核とした移民社会の構造的なつながりを分析するにはいたっていないため、今後どこに着地点を見出すのかという点においては未知数である。

日本人会ネットワークを中核として移民のコミュニティが拡大していくという山本剛郎の見解にも示唆を得て、本研究ではワシントン州における日本人会組織の変遷過程と制度分析を交差させることで日本人会組織の日常と変化の局面を同時にとらえ、あわせてカナダから南カリフォルニアに至るアメリカ西海岸の日本人会ネットワークの諸相、そこに交差する日本とアメリカホスト社会の諸組織・諸団体との関係を歴史的に位置付けることを試みた。本研究が提示した日本人会ネットワーク概念図によって、個別日本人移民社会に限定されるものではあるが、サンフランシスコやロサンゼルスはもちろん、カナダやオレゴン州に作られた日本人会の諸活動と位置付けについても総合的かつ立体的に把握できるようになり、多様なネットワークを概観する見取図が確立したといえるだろう。

ただし米山が考察しているように、いずれの地域にあっても日本人会内部には常にいくつもの派閥的対立があり、必ずしも一枚岩的な結束を維持していたわけではないことから、日本人会の活動に対して理

想的に過ぎる幻想を持つことは禁物である。本研究では日本人会そのものが残した諸記録の分析とその歴史的位置付けに力点をおいているため、日本人会を取り巻くホスト社会の諸団体(商工会議所や労働組合など)との関係や日本の海外協会との関わりについての考察は十分とはいえない。シアトルの労働組合と日本人会の関係については黒川勝利の研究『アメリカ労働運動と日本人移民—シアトルにおける排斥と連帯』(大学教育出版、一九八八年)があるが、今後はポトラッチ祭りははじめとする各種フェスティバルへの参加や社会事業を通じたホスト社会との連帯事例など地方日本人会によるホスト社会への参与の実態、意志表示の実例を掘り下げる必要がある。

(4) 日本語教育

日本人移民社会における日本語教育問題の研究は、ハワイ、カナダ、アメリカ各地をケースとした分析対象の拡がりともあいまって、比較的研究の進展した分野である。その主たる研究には沖田行司『ハワイ日系移民の教育史』(ミネルヴァ書房、一九九七年)、今井輝子・村川庸子「米国太平洋沿岸諸州における日本語教育およびその文化変容に関する一覽書—大戦間期の排日運動を背景に—」(『津田塾大学紀要』第一七号)、佐々木敏二「カナダにおける戦前の二世教育—日本式教育からカナダ式教育への転換—」(『立命館言語文化研究』二巻五・六合併号)、吉田亮「戦間期日系人のカナダ化—一世の二世教育観—」(『歴史学研究』第六八三号)などがあるが、これらに共通した論点は、日本人移民による二世教育の方針は当初日本主義的教育であったが、一九一〇年代半ばから強まったアメリカ(ハワイ)、カ

ナダのホスト社会が推進める教育・言語による移民の同化（アメリカ化、カナダ化）政策に直面したため、初期の教育方針を変更し、かつて使用していた日本の国定教科書を使用せず、独自にホスト社会の求める教育方針に順応した独自教科書の編纂にいたり、そこに日本人移民の大きな文化変容、アイデンティティの変遷を見出そうとするものである。それゆえその主たる研究対象は日本語学校を創設した教育者（例えばハワイの奥村多喜衛やカナダの佐藤伝など）の人物研究や日本語教育に圧力を加えたホスト社会の教育政策、日本の国定教科書と独自に編纂された日本語学校教科書との違いの分析に向かっていた。

本研究も基本的には上述した分析の視点を継承するものであるが、新たに提示した論点は、これまで本格的に研究されることのなかった特定の日本語学校での教育実態、日本語教科書の編纂過程にまで対象を広げ、シアトル国語学校の創設から閉鎖に至る過程を機軸にすえたことで、その軸にからみつく日米両国の「国民化」政策とそれとの関係から如何にして自らの子弟を育て上げるのかという課題に苦悩した日本人移民の姿を浮き彫りにしたことである。特に旧来十分に分析されてこなかった一九三〇年代の実態、とりわけ日本主義化の台頭によって一度は採用を見送った日本の国定教科書が復活するにいたった経緯を解明したことで、本研究によって一九〇〇年代初頭、二〇年代、三〇年代のそれぞれの局面において日本人移民が抱えていた二世教育の諸課題が通史的に明らかになったといえよう。

ただし分析上の視点があくまでも日本人移民一世の立場から見た日本語教育の動向分析であることから、実際に教育を受けていた子供た

ちの考えを充分に取り入れることができていない。子供時代の日本語学校の思い出についてはモニカ・ソネの *Nisei Daughter* (Seattle & London: University of Washington, 1979) などび知る事ができるが、日本語教育を受ける立場であった子供たちの思いを綴った史料の発掘は不可欠となる。また子供たちは昼間現地の公立学校にも通っていた。この点に関しては Bryce E. Nelson, *Good Schools: The Seattle Public School System, 1901-1930* (Seattle & London: University of Washington, 1988) の研究などを参照しつつ、公教育の中で子供の立場さらには各種教育環境全体の中での日本語学校の位置などについても考察を深めねばならない。

(5) アメリカにおける日本人農業

日本人移民によるアメリカでの農業経営に関する研究は地理学の分野で研究が進み、矢ヶ崎典隆がカリフォルニアにおける日本人花卉栽培の実態分析を中心に、同業者組合を形成しながら次第に都市近郊部に定住していく過程を描いたことで一つの到達点を得た（『移民農業』古今書院、一九九三年）。ただし矢ヶ崎の研究は排日問題とそれに対する日本人移民による主体的な対応という観点を当初から含めていないため、きわめて静態的な分析となっている。また問宮國夫『西原清東研究』（高地市民図書館、一九九四年）、T・K・ウォーレス『テキサスの日系人』（芙蓉書房出版、一九九七年）は、日本人によるアメリカでの米作経営の先駆者として著名な西原清東の行動を精緻に追及したものであるが、研究の視点が人物研究におかれているため、ホスト社会における農業問題や排日状況、日本人農業の構造的な

窓 分析には弱さがある。

他方、アメリカにおける日本人農業問題に関しては、カリフォルニア州やワシントン州で制定された外国人土地法（いわゆる排日土地法）問題を抜きにして語ることができないが、後述するように、従来外国人土地法問題を考察の対象とした研究は、同法をめぐる日米関係や大統領と議会の対立の一点としての外国人土地法問題を扱うなどアメリカ国内での政争問題の一つとして位置付けてきたため、法律の被対象者であった日本人移民の農業実態分析に関しては全くといってよいほど配慮してこなかった。

そうした研究状況のなかでワシントン州を事例に個別研究をおこなったのが村山裕三『アメリカに生きた日本人移民―日系一世の光と影』（東洋経済新報社、一九八九年）である。村山は計量経済学の手法を用いつつ、まずは鉄道や製材所での賃金労働者時代を経てしだいに資本を蓄積していった日本人移民が、やがて自営借地農業者へと進展していく過程を描き（これを「光の時代」とし）、ついで一九二〇年代以降に排日土地法政策が実施されるとこれによって経済コストを伴わない法律面からの日本人差別が完成し、いわば不幸な時代となっていく（これを「影の時代」とする）という歴史像を描いた。

しかし村山にあっても農業経営の実態分析は、一九二六年にワシントン大学に修士論文を提出した日系二世 John Nishinoiri の農業ネタその他に依拠するものの、それ以外には既存の日本人農民による回顧談を紹介するにとどまるなどやや簡略に過ぎたといわざるをえない。また一九二〇年代半ばから四〇年代にいたる十数年間の検討（いわゆる空白の一九三〇年代分析）がなされないまま一九四一年の太平

洋戦争勃発と翌年から始まる日系人強制収容へと叙述が短絡するといふ問題をはらんでいた。

こうした研究状況をふまえ、本研究では研究事例の少ないワシントン州を対象にすえ、村山が提示した「光と影」というあいまいなとらえ方ではなく、外国人土地法のもつ本質が定住外国人の社会経済的諸権利の剝奪にあると位置付け、同権利へのアクセス期、剝奪期、新たなアクセスと三つに時期区分し、それぞれの時期における日本人農業の実態について各種統計資料を駆使して明らかにすることを試みた。

日本人農業の活動を三期に区分したのは矢ヶ崎の研究を応用したもののだが、本研究によって個別ワシントン州における日本人農業者の社会的結びつきや協同化の実態が具体的に明らかにしたといえるだろう。ただし日本人農業者とホスト社会の地主との関係、同様にマーケットにおける白人農業者や農産物販売業者との関係、日本人農業経営者と農業労働者との関係などについての分析は不十分であるといわねばならない。こうした点については本研究の刊行後に知った Thomas Heuterman, *The Burning Horse: The Japanese-American Experience in the Yakima Valley 1920—1942* (Cheney: Eastern Washington University Press, 1995) Stan Flewelling, *Shirakawa: Stories from a Pacific Northwest Japanese American Community* (Auburn: White River Valley Museum, 2002) など を参照し、ヤキマ地域やホワイトリバー周辺地域に関する農業史の成果も取り入れ総合的に考えていくことが求められよう。

(6) 外国人土地法問題

アメリカにおける日本人移民排斥問題の象徴ともいえる「外国人土地法」問題については、つとに日米関係史研究の中で進められ、この分野に関する先行研究のガイドとしては、前掲『日本の移民研究』所収「日本人移民受け入れ政策」（執筆佳知晃子）の項目が有益である。基本史料には一九三三年に外務省が編纂した『対米移民問題経過概要』があり、それによって一九〇〇年代初頭の排日事例から一九一三年および二〇年のカリフォルニア州での外国人土地法制定過程と日米両政府の動向ならびに一九二四年移民法の制定問題にいたる政治・外交過程が詳細にあとづけられた。その後の当該問題に関する研究は、この外務省文書を基本にすえ、そこにアメリカにおける排日世論や州議会の法制化、連邦政府関係者による諸記録を加え、いかなる政治状況のもとで排日諸法が制定されたかという点を精緻に分析してきたといえる。最近の研究には水谷憲一「一九二一年米国緊急割当法成立過程―排日論とネイティヴィズムの接点―」（『移民研究年報』第四号）があり、東欧、南欧からの新移民を制限しようとした東部のネイティヴィストと西部の排日論者との結びつきが、二四年移民法における日本人排斥の準備過程であったとしている。

こうした研究は、いわば、アメリカ社会の中でどのようにして排日状況が生まれ、なぜ日本人移民が排斥されていったのかという視点から考察するものであったことから、排斥の対象となった日本人移民の実態や排斥に対する主体的な取り組みについて考察されることはなかった。そのためそこから想起される日本人移民像は、常にアメリカに

よって排斥され続けた悲劇的な移民集団というイメージとなってしまう。た。

こうした移民史研究に対して、被排斥の当事者である日本人移民に視座を置き、排日状況に直面しつつも単に排斥され続けたのではなく、主体的に排斥状況に立向っていったという観点から移民史の叙述を試みたのが、ユウジ・イチオカである。イチオカは『一世』の中で小沢孝雄帰化権訴訟と並行して取り組まれていた外国人土地法違憲訴訟の経緯を明らかにするとともに、土地法訴訟に敗れたあとの日本人移民がいかなる方法を駆使して土地法の網の目をかいくぐり活路を見出そうとしたのかという点にまで踏み込んで叙述し、移民史研究の新たな領域を築いた。

本研究の立場も基本的にはイチオカの提示した論点をふまえたもので、ワシントン州の日本人会に結集した日本人移民の主体的な土地法対策の実際について、多くの未公開資料を用いて実証し、排斥されてばかりの日本人移民という歴史像の修正を旨指したものである。ただし本研究においても日本人移民の排日対策という視点に終始してしまつたため、日本人排斥問題に抗議の意志表示をおこなった労働組合やキリスト教関係者の言動については十分な分析をとげることができなかつた。こうした点については今後ホスト社会の中の「親日」的団体の動向とその歴史的な役割などについて配慮し、検討する必要がある。

(7) 二重国籍問題

移民の法的地位を決定づける国籍条項や市民権、帰化権問題に関する

窓
る研究は、第二次大戦直後に繰り広げられた帰化権獲得闘争を記録したトマス・K・竹下『大和魂と星条旗』（山王書房、一九六七年、改訂新版朝日新聞社、一九八三年）に始まり、フランク・F・チューマンの『バンブー・ピープル』上下（サイマル出版会、一九七八年）によって一つの到達点を得たといえる。とりわけチューマンの『バンブー・ピープル』はアメリカにおける日本人移民ならびに日系アメリカ人を取り巻く法律上の諸問題に包括的に取り組み、州レベルのみならず、連邦レベルの判例を分析し、その後の研究の基礎を確立したものである。しかしこうしたチューマンの研究にあっても日本の国籍制度との関係からアメリカで生まれた二世が二重国籍状態となり、それが新たな排日問題となったことについての言及が、きわめて簡略であったことは否めない。

この二世の二重国籍問題とその解決運動に論及したのもイチオカであった。イチオカは、一世たちが抱えていた二世認識の総体をまず「第二世問題」として把握し、その問題群の中に日本語教育問題と二重国籍状態への憂慮があったことを描き出し、太平洋沿岸日本人会議会による教科書編纂問題と日本国籍法改正運動の実態を明らかにした。

本研究は、基本的にイチオカの成果を踏まえつつも、日本人移民による日系二世の二重国籍問題解決運動の歴史過程を実証的に解明することを目的としたもので、地方日本人会―聯絡日会―沿岸日会―日本支部というネットワーク的連携の中で当該問題の解決運動が展開されたこと、二世の二重国籍状態の解消が新たな二世の政治的、経済的活動の場を拡大することになったという意義を明らかにした。

確かに二世の二重国籍問題については一九二四年の日本の国籍法改正によって日本国籍の離脱に関する制度的制限は撤廃された。しかしその後も日米の両国籍を保持していた二世は多数存在し、二重国籍という立場を利用して日本に滞在する者も多くなった。それらは後にアメリカに帰ると「帰米二世」と呼ばれることになったが、本研究ではこの点まで言及するにはいたらなかった。一九三〇年代の国籍問題については衆井輝子「一九三〇年代の帰米運動―アメリカ国籍法との関連において―」（『移住研究』第三〇号）があり、日本で兵役を受けた二世はアメリカ国籍を剝奪されるため、二世のアメリカ国籍の喪失を懸念した在米一世たちが積極的に日本滞在中の二世にアメリカ帰国を促した事例が明らかにされた。またシアトルにおける帰米二世の動向については坂口満宏「帰米二世をめぐる断章―シアトル日系帰米二世協会の組織と活動―」（『移民研究年報』第七号）が詳しい。今後は日米両国の徴兵制度と移民の国籍付与・剝奪条項等の問題、カリフォルニア州における帰米二世の動向についても検討されねばならないだろう。

（8） 日米戦争開戦前夜の日本人移民

これまでアメリカに移り住んだ日本人移民史に関する研究は、一九二四年の移民法（この法律によって「帰化不能外国人」と見なされた日本人の移民としてのアメリカ移住が不可能となった）を節目に一世の時代が完結するかのような叙述がなされてきた。『日米文化交流史』五移住編においても、またイチオカの『一世』においても一九二四年移民法との闘いをもって一世の時代の節目と見なし、その著述を

閉じた。そのため日系アメリカ人史に関する研究は、阪田安雄が指摘したとおり、一九二四年の移民法制定から日系人の強制収容が始まる一九四二年に至るまでの一七年余りの歴史分析に空白を生むことになった。しかしこの間の歴史状況を考察しようとするならば必然的に一九三〇年代の日本人移民にみる日本主義化の実態、日本の軍事侵攻を積極的に支援しようとした姿を取上げざるを得なくなり、そこから明らかにされる歴史認識は、勢い、戦後まもなくに展開された移民一世の帰化権獲得運動さらには一九八〇年代のリドレスを推し進めるうえでマイナス要因とみなされかねず、歴史研究の対象とすること自体がタブー視されたわけである。

悲願であったリドレスの達成にともない、一九九〇年代に至って、こうした歴史研究上のタブーに対する呪縛から自由になることができた。一九三〇年代史の解明に向う研究がなされるようになった。糸井輝子の『外国人をめぐる社会史』は一九三〇年代の在米日本人による祖国支援活動の事例を紹介した研究の先駆けであり、糸井も編纂に参画した広島県編『広島県移住史』通史編・資料編（広島県、一九九三年）には同様の事例が復刻資料として提示され、新しい研究の糧となっている。

また三輪公忠編著『日米危機の起源と排日移民法』（論創社、一九九七年）はアメリカにおける一九二四年移民法がもたらした諸問題を多角的に考察した共同研究の成果で、同法が日本の移民政策に与えた影響、日本人が「帰化不能外国人」と規定されるにいたった「人種」概念の本質、日米以外の国々に波及した影響などを幅広く追及している。個別研究では廣部泉が「排日条項修正運動と修正反対運動の起

源」をあらわし、移民法制定直後からアメリカで同法修正運動が始まったが、そのナイーヴな修正運動＝平和主義が逆に排日条項の挿入に満足していた排日勢力の目を覚まさせることになったことを明らかにしている（廣部泉「排日条項修正運動と修正反対運動の起源」『移民研究年報』第二号、および Hirobe Izumi, *Japanese pride, American prejudice: modifying the exclusion clause of the 1924 Immigration Act*, Stanford: Stanford University Press, 2001）。

一九三〇年代の日本人農業をめぐっては松本悠子が「一九三六年ロス・アンジェルズセロリストライキと日系農業コミュニティ」の中で、日本人農民とメキシコ人農業労働者との関係を具体的に考察し、白人以外の少数他民族と日本人移民との関係を取上げている。その後も松本は、戦間期のロサンゼルスにおける移住者とその子孫による「アメリカ化」の要因とその意味を探り続け、日系にとどまらずその対象をメキシコ系、アフリカ系アメリカ人へと広め、それぞれにみる「われわれ意識」と「国民化」の問題を考察している（松本悠子「内在する「他者」と「国民化」——二〇世紀前半のロスアンゼルスにおける日本人移民の「米化」——『中央大学文学部紀要』史学科第四五号、同「移住者たちがつくる都市ロスアンジェルズ——多人種社会における「アメリカ人」の意味——」（『歴史学研究』第七五五号）。

カリフォルニア州ストックトンを事例に一九三〇年代の日本人農民とフィリピン人労働者との関係を分析した東栄一郎は、強力な労働組合を組織したフィリピン人移民の台頭に脅威をおぼえた日本人移民が白人地主と同盟してフィリピン人の脅威を押さえ込もうとしたが、究極的には白人地主以外に利益を生むものではなく、日本人とフィリピ

窓
ン人は勝っても負けても自らの「民族生存競争」の犠牲者となったこ

とを明らかにした。こうした東の研究は、日本人移民史における三〇年代研究と異民族関係研究という二つの「空白」の解明をおこなったもので、今後進めるべき移民史研究の課題と方法を提示するものとして極めて重要なものである(東栄一郎「一九三〇年代の在米日本人移民コミュニティとフィリピン人移民」『移民研究年報』第二号、以下 Azuma Eiichiro, "Interstitial Lives: Race, Community, and History among Japanese Immigrants Caught Between Japan and the United States, 1885—1941" (Dissertation, University of California, Los Angeles, 2000)。

他方、アメリカにおいてもブライアン・ハヤシはロサンゼルスの日系人キリスト教会や日本人会が一九三〇年代になると日本文化の賞賛に傾き、日中戦争が勃発すると戦争協力を行なった事実まで踏み込み、新たな史実を公表している (Brian Masaru Hayashi, 'For the Sake of Our Japanese Brethren, Stanford: Stanford University Press, 1995)。*た *Amerasia Journal* 第二三巻第三号(一九九七年八月)は "Beyond National Boundaries: The Complexity of Japanese-American history" という特集を組み、満州事変前後の日系アメリカ人の動向を描いた論文を収録している。ここでは主に人物研究に焦点が当てられたが、これを機にこれまでの封印が解かれ、今後各種日系人団体の動向が対白人、白人以外の諸民族との競争・対立・宥和という構図のもとで明らかにされていくならば、新たな一九三〇年代像が生まれることだろう。

もとより本研究もこうした研究動向を念頭に置きながらワシントン

州に実証事例を求め、アメリカに生き続けることを選択した「在米日本人」の出身国日本と定住国アメリカの双方にむけて発せられた「二重の忠誠表明」という生き方を見出し、それを移民の「定住戦略」と名付けて解釈したものである。研究史上の新味を見出すとすれば、「日本人」移民がいかなる精神的葛藤を経て、いつごろ、どのようにして「在米日本人」というアイデンティティを明確にするにいったか、さらには出身国日本と定住国アメリカの双方にむけて発せられた「在米日本人」の各種意思表示をとらえ、そこにこそ彼等の「二重の忠誠表明」があったのだと踏み込んだ性格づけをほどこしたことだろう。換言すれば、こうした日本人移民像の描き方は、従来の日本人移民像——すなわち日本からアメリカに渡っていった日本人は如何に排斥されようともアメリカに留まり、定住国に貢献し、いかに良きヘアメリカ人になるうとしたか、という単線的な「国民の物語」——とは異なるもので、移民の位置づけにおいても単純にアメリカ史や日本史の一部として把握するのではなく、移民とは定住国・出身国の双方から歓迎される存在であろうとするものであり、こうした移民のアイデンティティを暴力的に踏みじるところにこそ国民国家の本質があるのとらえたことである。

こうした移民像を提示した本研究によって移民史における「空白の一九三〇年代」にも踏み込むことができたと考えられるが、日本人移民による「二重の忠誠表明」という「定住戦略」の史料の根拠が各種声明文や少数の言説から見出したものであるため、なにゆえに、またはどのような社会的・思想的環境からこうした「二重の忠誠表明」という考えを持つにいたったのか、さらにはそうした考えは単なる言説とし

てではなく、実際にどの程度当時の日本人移民社会に浸透していたものなのか、といった実態に内在した分析を欠いているため、極めて皮相な考察となっていることも認めねばならない。

それだけに今後は日本人会や一部農業関係者の動向分析にとどまることなく、またいくつかの声明や言説に依拠することなく、日系以外の民族集団や個人、各種団体と日系社会との交流や摩擦の実態の掘り起こしをつうじて、より厚みのある一九三〇年代像を示さねばならないだろう。この点において、本研究は一つの問題提起であり、今後の議論の端緒となれば幸いである。

おわりに

本研究が採っている主たる研究方法―すなわち可能な限り日本人移民一世たちが生きていた同時代の一次資料に立脚して史実を再構成し、意味づけるというそれは、つとにユウジ・イチオカ氏によって提唱され、実践されてきたことである。その意味において、本研究はイチオカ氏が築き上げてきた移民研究上の本線ともいべきレベルの上を走り、少しばかりの支線を延ばしたものにすぎないといわねばならない。イチオカ氏が築いてきた研究上の大枠をどのようにすれば乗り越えることができるか―本研究は常にそうした問いと模索の中から生れたものであった。この点において、本研究が果たしてイチオカ氏の目にどのように映ったのだろうか、ということが最も気になることであった。しかし今となってこれは叶わぬ望みである。本稿は、拙著を補う意味でまとめたものだけに「自画自賛」のそしりをまぬかれないが、拙著とともにあらためて大方の批判を乞うしたいである。

主要日本語参考文献

- 特集「移民のエスニシティと活力」(『アジア遊学』第三九号)
 東栄一郎「一九三〇年代の在米日本人移民コミュニティとフィリピン人移民」(『移民研究年報』第二号)
 飯島渉編『華僑・華人史研究の現在』(汲古書院、一九九九年)
 飯野正子『もう一つの日米関係史―紛争と協調のなかの日系アメリカ人』(有斐閣、二〇〇〇年)
 ユウジ・イチオカ『一世』(刀水書房、一九八二年)
 伊藤一男『北米百年桜』(日貿出版社、一九六九年)、同『続北米百年桜』(日貿出版社、一九七二年)、復刻版『日本人海外発展史叢書』(P.M.C.出版、一九八四年)
 井上順孝『海を渡った日本宗教』(弘文社、一九八五年)
 今井輝子・村川庸子『米國太平洋沿岸諸州における日本語教育およびその文化変容に関する一覚書―大戦間期の排日運動を背景に―』(『津田塾大学紀要』第一七号)
 移民研究会編『日本の移民研究 動向と目録』(日外アソシエーツ、一九九四年)
 移民研究会編『戦争と日本人移民』(東洋書林、一九九七年)
 伊豫谷登士翁、杉原達編『日本社会と移民』(明石書店、一九九六年)
 『岩波講座世界歴史』一九 移動と移民(岩波書店、一九九九年)
 R・ウイエルソン、B・ホソカワ『ジャパニーズ・アメリカン』(有斐閣選書R、一九八二年)
 植木照代他『日系アメリカ文学―三世代の軌跡を読む』(創元社、一九九七年)
 上山和男、阪田安雄共編『対立と妥協』(第一法規、一九九四年)
 T・K・ウォーレス『テキサスの日系人』(芙蓉書房出版、一九九七年)
 姥原八郎『海外邦字新聞雑誌史』(学而書院、一九三六年、名著普及会、一九八〇年復刻)
 ジョン・オカダ『ノー・ノー・ボーイ』(晶文社、一九七九年)
 岡部一明『日系アメリカ人 強制収容から戦後補償へ』(岩波ブックレット 二三四号、一九九一年)

- 岡部牧夫『海を渡った日本人』（日本史リブレット五六、二〇〇二年）
 沖田行司『ハワイ日系移民の教育史』（ミネルヴァ書房、一九九七年）
 小倉充夫編『国際移動論』（三嶺書房、一九九七年）
 梶田孝道編『国際社会学』（名古屋大学出版会、一九九二年）
 神奈川大学人文科学研究所編『民族と国家』の諸問題』（神奈川新聞社出版局、一九九一年）
 アケミ・キクムラ『ヤノ編』アメリカ大陸日系人百科事典』（明石書店、二〇〇二年）
- 木村靖二、上田信編『人と人の地域史』（『地域の世界史』九、一九九七年）
 衆井輝子、飯野正子「日本における日本人移民、日系アメリカ人研究」（『東京大学アメリカ研究資料センター年報』第一三三号、一九九〇年）
 衆井輝子『外国人をめぐる社会史―近代アメリカと日本人移民―』（雄山閣、一九九五年）
- 衆井輝子「一九三〇年代の帰米運動―アメリカ国籍法との関連において―」（『移住研究』第三〇号）
 黒川勝利『アメリカ労働運動と日本人移民―シアトルにおける排斥と連帯』（大学教育出版、一九八八年）
 桑原靖夫『国境を越える労働者』（岩波新書、一九九一年）
 児玉正昭『日本移民史研究序説』（渓水社、一九九二年）
 坂口満宏「帰米二世をめぐる断章―シアトル日系帰米二世協会の組織と活動―」（『移民研究年報』第七号）
- 阪田安雄「戦後五〇年と日系アメリカ人史研究―語られない一九三〇年代―」（『移民研究年報』創刊号）
- 阪田安雄「移民研究の歴史的考察とその課題」（『日系移民資料集』第一期 北米編、第一八巻、解説・資料編、日本図書センター、一九九四年）
 佐々木敏二「カナダにおける戦前の二世教育―日本式教育からカナダ式教育への転換―」（『立命館言語文化研究』二巻五・六合併号）
 佐々木敏二『日本人カナダ移民史』（不二出版、一九九九年）
 重松伸司『国際移動の歴史社会学』（名古屋大学出版会、一九九九年）
 篠田左多江、山本岩夫共編著『日系アメリカ文学雑誌研究―日本語雑誌を中心に』（不二出版、一九九八年）
- 島田法子『日系アメリカ人の太平洋戦争』（リーベル出版、一九九五年）
 新保満・田村紀雄・白水繁彦著『カナダの日本語新聞』（PMC出版、一九九一年）
- 神繁司「ハワイ・北米における日本人移民および日系人に関する資料について」(1) (4)（『参考書誌研究』第四七、四八、五二、五四号）
 杉浦直「アメリカ合衆国における日系移民集団の地理学的研究―その成果と課題―」（『移民研究年報』第七号）
- 竹内幸次郎『米国西北部日本移民史』（大北日報社、一九二九年、のちに雄松堂より復刻）
 竹沢泰子『日系アメリカ人のエスニシティ―強制収容と補償運動による変遷―』（東京大学、一九九四年）
 トマス・K・竹下『大和魂と星条旗』（山王書房、一九六七年）
 田村紀雄・白水繁彦編『米国初期の日本語新聞』（勁草書房、一九八六年）
 田村紀雄編著『正義は我に在り』（社会評論社、一九九六年）
 フランク・F・チューマン『パンブー・ピービル』上下（サイマル出版会、一九七八年）
- 戸上宗賢編著『交錯する国家・民族・宗教―移民の社会適応―』（不二出版、二〇〇一年）
- 外村大「戦前期在日朝鮮人の社会的結合・文化・アイデンティティ」（『歴史学研究』七五五号）
 富山一郎「近代日本社会と「沖縄人」―「日本人」になるといふこと―」（日本経済評論社、一九九〇年）
- 同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』（PMC出版、一九九一年）
- 同志社大学人文科学研究所編『在米日本人社会の黎明期―福音会沿革史料』を手がかりに』（現代史料出版、一九九七年）
 中牧弘允『新世界の日本宗教』（平凡社選書、一九八六年）
 広島県編『広島県移住史―通史編、資料編』（広島県、一九九三年）
 広田康生『エスニシティと都市』（有信堂、一九九七年）
 廣部泉「排日条項修正運動と修正反対運動の起源」（『移民研究年報』第二号）

福田守利「日本人は日系人を理解できない」(『中央公論』一九八四年九月号)

ハルミ・ベフ編『日系アメリカ人の歩みと現在』(人文書院、二〇〇二年)ビル・ホソカワ『二〇%の忠誠』(有斐閣選書R、一九八四年)

松本悠子「内在する「他者」と「国民化」——二〇世紀前半のロスアンジェルスにおける日本人移民の「米化」——」(『中央大学文学部紀要』史学科 第四五号)

松本悠子「移住者たちがつくる都市ロスアンジェルス—多人種社会における「アメリカ人」の意味—」(『歴史学研究』第七五五号)

松本宣郎、山田勝芳編『移動の地域史』(『地域の世界史』五、山川出版、一九九八年)

間宮國夫『西原清東研究』(高地市民図書館、一九九四年)南川文里「エスニック・タウンの経済的編成—リトルトーキョーの初期形成過程を通して—」(『移民研究年報』第七号)

水谷憲一「一九二一年米国緊急割当法成立過程—排日論とネイティブイズムの接点—」(『移民研究年報』第四号)

三輪公忠編著『日米危機の起源と排日移民法』(論創社、一九九七年)村山裕三『アメリカに生きた日本人移民—日系一世の光と影』(東洋経済新報社、一九八九年)

矢ヶ崎典隆『移民農業』(古今書院、一九九三年)柳沢遊・岡部牧夫編『帝国主義と植民地』(展望日本歴史二〇、東京堂出版、二〇〇一年)

柳田利夫編著『アメリカの日系人—都市・社会・生活—』(同文館、一九九五年)

山田史郎他著『近代ヨーロッパの探求 1 移民』(ミネルヴァ書房、一九九八年)

山本剛郎『都市コミュニティとエスニシティ』(ミネルヴァ書房、一九九七年)

吉田亮『アメリカ日本人移民とキリスト教社会—カリフォルニア日本人移民の排斥・同化とE・A・ストージ』(日本図書センター、一九九五年)

吉田亮『戦間期日系人のカナダ化—一世の二世教育観—』(『歴史学研究』

第六八三号)

米山裕「羅府日本人会役員選挙と在ロサンゼルス日本人社会の変容、一九一五—一九二一年」(『立命館史学』第二二号)

特集「人の移動から歴史を見る」(『歴史学研究』五八一、五八二号)近代史部会「近代世界における移住者と国民統合」(『歴史学研究』六一三号)

近代史部会「都市における移住者の世界」(『歴史学研究』七五五号)特集「近代日本の『移民』を問いなおす」(『歴史評論』五一三号)

特集「移民と近代社会」(『歴史評論』六二五号)

主要英語参考文献

Daniels, Roger. *Asian America: Chinese and Japanese in the United States since 1850* (Seattle & London: University of Washington Press, 1988)

Flewelling, Stan. *Shirakawa: Stories from a Pacific Northwest Japanese American Community* (Auburn: White River Valley Museum, 2002)

Hayashi, Brian Masaru. 'For the Sake of Our Japanese Brethren' (Stanford: Stanford University Press, 1995)

Hayashi, Katie Kaori. *A History of The Rafu Shimpō: Japanese and Their Newspaper in Los Angeles* (Osaka: Union Press, 1997)

Heuterman, Thomas. *The Burning Horse: The Japanese-American Experience in the Yakima Valley 1920-1942* (Cheney: Eastern Washington University Press, 1995)

Ichioka Yuji, Sakata Yasuo, Tsuchiya Nobuya, Yasuhara Eri. *A Buried Past: An Annotated Bibliography of the Japanese American Research Project Collection* (Berkeley: University of California Press, 1974)

Ichioka, Yuji. *The Issei: The World of the first generation Japanese Immigrants 1885-1924* (New York: The Free Press, 1988)

Io, Kazuo. *Issei: A History of Japanese Immigrants in North*

- America* (Seattle, 1973)
- Kikumura, Akemi. *Through Harsh Winters: The Life of a Japanese Immigrant Woman* (Novato: Chandler & Sharp Publishers, Inc.)
- Lowe, Lisa. *Immigrant Acts* (Durham: Duke University Press, 1996)
- Matsumoto, Valerie J. *Farming the Home Place: A Japanese-American Community in California 1919-1982* (Ithaca & London: Cornell University Press, 1993)
- Miyamoto, Frank. *Social Solidarity among the Japanese in Seattle* (University of Washington Publications in the Social Sciences 2, 1939, reprinted 1981, 1984)
- Nelson, Bryce E. *Good Schools: The Seattle Public School System, 1901-1930* (Seattle & London: University of Washington, 1988)
- Okada, John. *No-No-Boy* (Seattle: University of Washington Press, 1957, 1976)
- Sakata, Yasuo. *Fading Footsteps of the Issei: An Annotated Check List of the Manuscript Holding of the Japanese American Research Project Collection* (Los Angeles: Asian American Studies Center, Center for Japanese Studies, University of California at Los Angeles: Japanese American National Museum, 1992)
- Sone, Monica. *Nisei Daughter* (Seattle & London: University of Washington Press, 1979)
- Spickard, Paul R. *Japanese Americans: The Formation and Transformations of an Ethnic Group* (New York: Twayne Publishers, 1996)
- Takezawa, Yasuko I. *Breaking The Silence: Redress and Japanese American Ethnicity* (Ithaca & London: Cornell University Press, 1995)
- Tamura, Linda. *The Hood River Issei: An Oral History of Japanese Settlers in Oregon's Hood River Valley* (Urbana & Chicago, University of Illinois Press, 1993)